

# ライフ・ニッツに於ける個性の問題 (一)

由良 哲次

## 一、緒説

私は先づこの緒説に於てライフ・ニッツに關して特に考察せんとする私の意圖の若干を、寧ろ私自らの疑問と希望の形に於て要約的に示して見たい。

私は彼の哲學に於て、彼が七十年の生涯を通して辿つた迂餘と發展を貫いて、又古今に比類少き程の多面的なる關心の種々なる領域を通じて、その最も根本的なる概念として止まるものを個別的實體もしくは個性に見出す。この小篇は一つにライフ・ニッツに於けるこの概念をテーマとし、こゝに生じうべき種々なる問題の考察に捧げられる。然らばこの個性てふ概念に對して如何なる問題がありうるであらうか。これに關しては私は先づ種々なる問題を、個性の實在に關する問題と、個性の認識に關する問題とに分ちたい。

この前者に於ては私は先づこの個性概念が彼に於て如何にして生じ、如何なる役

目をもち、本質的に如何なる意味を有してゐたかを尋ねて見たい。この個別實體の考察に彼は數學的素數、物理的アトムの性質より考へ進めたのであらうか、果た歴史の個性の本質の反省、もしくは主觀に於ける自覺の事實より到達したのであらうか。この個別的にして且つ實體的なるものは事實眞理の世界と、永久眞理の世界とに、それ／＼如何なる關係に於てあるのであらうか。

彼がこの個性的實體に於て認むる法則的なるもの——*ordre que la notion de notre substance individuelle porté; vertu des propres lois de substance; règle de substance individuelle*——私はこれを個性法則と名づける——個性てふ唯一的なるべきものと一般的法則的なるものとは如何にして矛盾なく結合することを得るのであらうか。これの可能は個性的實在によつてなる歴史の領域に固有の法則性を保持する基礎を供するであらうか。かゝる法則性はその領域の學的確立を容易にしても、史的文化的領域に於ける自由と創造とに對して如何に關係するであらうか。又一般に史的領域の必然的宿命觀より如何にして免るゝことを得るであらうか。

個性と廣義に於ける先天との關係が明かにせらるゝならば、ライブニッツに於て存する、しかも、やゝもすれば輕視し去られんとする生具説や素質てふ概念により深

き意味を見出しうると思はれる。抑、ライプニッツに於ける、いはゞ、實體的先天綜合と、カントに於ける如き論理的先驗綜合とは如何に關係するであらうか。ライプニッツに歸せらるゝ『獨斷的』なる貶斥の語はこの先天的なる語の如何なる意味に於ては雪がるべく、如何なる意味にてはその正しき特質づけと言ふべきか。これらに關係して又私は、歴史的文化的領域に必然的なる史的、先天なる概念を認めたいと思ふ。あらゆる史的實在と文化の現象には所謂意識一般の綜合と、單なる自識の範圍にては説きえざる固有にして根本的なる先天構想力の創造に俟つものがあると思はれる。ライプニッツの個性概念の裕かなる理解はこの事を指示しないであらうか。

彼に於ける個性的實體、もしくはモナドの相互關係に關して屢、疑はれ且つ誤解されつゝある問題は、單子、無窓と單子相關の問題である。單子窓なしといふ特質づけと、しかも屢、繰返さるゝ單子の affection, influence, patir, communication を特性とすることゝは如何にして矛盾せざるを得るのであらうか。個性の有する獨自の先天構想力即ち唯一性を帶ぶる發展の必然性、換言すれば『各々の實體がその存在とゝもに受取つた自己固有の法則にのみ従ふ』といふ根本制約に關係してのみ、すべての個性の現實的作用と屬性——従つてその發展と相關は可能であると思ふ。即ち私はこの問

題をやはり、個性概念の深化に於てのみ解きうべきものと思ふが、それはライプニッツに於て如何なる根據を見出しうるであらうか。

神によつて造られたるものは、相關を特質とする。これより *raison* をとることはその *raison d'être* を奪ふことである。單子に本源的なることは—— *qui entre dans les composés*——である。ライプニッツに於てはあらゆる實在は、實在それ自身に於ても、又他の實在に對しても、本質的に相關のあり、調和的である。彼にては相關は實在の根本特質である。——茲に於て吾等は疑はねばならぬ。實在の真相はその辨證的なることに於て見出され、辨證は實在の根本特質にはあらざるか。辨證がもし、對立と相剋の關係にあり、その因由がそれに内在する矛盾に於てあることを意味するならば、それは單なる相關ではない。ライプニッツに於ける相關は、調和を本質とするならば、それは矛盾を本質とする辨證とは調和すべくもない。辨證と相關、この二者は如何に關係するか。辨證の根柢に相關あり、辨證とは相關の一樣相に外ならぬと解すべきであらうか。もしくはは相關は協和的なる辨證は *transcendental* なる見地の相違に歸し、又は調和と悲劇的靜觀的と争鬭的なる人生觀上の二つの原型に歸して二元の相對に安んずべきであらうか。もしくははこれを時に爾か解さるゝ如く、性格による選

擇の自由に放任さるべきか。果たフイヒテ自らの眞意であつた様に、これを哲學觀の深化の過程上の到未到の段階に於て理解すべきか、——私は只個性概念の沈潜によつてのみ、自らこの極めて深奥にして至難なる問題と直面し相剋せねばならぬ。

個性はおのづから神との關係に關して、吾等に考究を強いる種々なるものをもつ。私はライブニッツに於て個性概念の深化に於て認めらるゝ特有なる神の論證が存すると思ふ。普通考へらるゝ神の論證として神の至完性より説く *ontologischer Beweis* 第一原因としての神を定立する *cosmologischer Beweis* 宇宙の合目的性を根據にする *teleologischer Beweis* 神の實在を道德的要請に基づける *moralischer Beweis* を擧げうべしとせば、ライブニッツの神の論證の仕方はこの何れに屬し、もしくは、これらと如何なる關係に立つのであらうか。彼に於ては以上の四種のすべてが、それらの要素として含まれてゐると言ひ得るであらう。しかし彼に最も特質的なる所は、原因としての神を定立するのではなく、個性といふ事實の深き内省よりそのの充全なる理由を求めてこれを神に歸着せしめた所にある。茲に彼の神觀の特質性があると思ふ。然らば彼にては個性と神との關係が如何に特質的なる概念を *Moment* として説かるゝのであらうか。彼に於ける神の概念は如何なる點に於て特質的であらうか。

ライブニッツにては現實はすべて神の最高の意志によつて、無限可能の世界より、善として選び出され、實現し出されたものである。そは神の國そのもの、様に、美はしき調和と最善をもつ世界である。しかし乍ら吾等がこの現實に於て逢著し經驗せざるをえざる悪と不完全性のあることはライブニッツ自らも認める所である。この悪と不完全は彼の最大の樂天觀より如何に究極的に説明さるゝであらうか。彼の至善觀に於ける惡の起源は如何であらうか。この問題に於て、善を目立たしむる單なる藥味、陰影としての便宜的なる説明の外に、惡と現實の不完全性の基礎を個性てふ概念そのものに本源的に含む必然的性質に汲み出さるべきではないであらうか。然してこの事より、又自ら、彼の意味する惡、人間の歴史の有限性と相關性の特異なる思想の眞面目を把握することが出來うるかに思ふ。

この事と關聯して、ひいては又ライブニッツが後世に二つの方として偉大なる影響を及ぼした彼に於ける二つの——時に相背反するが如き二つの要素の關係の問題がある。——そは即ち神に於ける思惟と意志との問題である。ライブニッツに於ては神の思惟に於てある永久眞理の世界は只自同律に従ふのみなる獨自の存立を有し、そは吾等の個性の世界、意識の作用より超越する。永久の眞理は吾等の何人

が考へるにも先立つて存し、又あらゆる意識の作用に依存するを要せざる客観妥當の世界である。これに對して偶然的なる事實、作用と意欲の世界は只理由律によつてのみその存在の基礎を享け、只神の *choix du meilleur* によつてのみ現實に齎らされたるものである。すべてが全體としての統一調和を有すべしと自らも信じてゐた彼の體系に於て、この超越必然と内在的作用の世界とは如何なる基底によつて結合され歸一するのであらうか。彼の史的個性と現實の問題にいみぢき力を有した主意主義と目的論とは彼の眞理觀によつて一皆がその光を奪はるゝのであらうか。彼が *Theodicee* の三位一體論に於ける至高概念と相照應せしめた *pissance* の概念をもつて、*connaissance* と *volonté* を綜合するものと見ることは不可能であらうか。彼を享けたヘルバルト、ボルツァノの超越的客観主義と、カント、ロツチエ、コーヘンに傳はつた内在的主観主義とはその何れが正しき彼の眞精神を傳へるのであらうか。この二つの傾向の綜合に於て吾等は全たきライブニッツに歸り、彼より眞に現代的な意味と命を汲みとることは不可能であらうか。

以上はライブニッツに於ける個性的實體の實在に關して私の疑問、私の問題の若干を氣付くまゝに叙したのであるが、これに對して尙ほ個性の認識の問題が考へら

れる。先づ一般に認識の對象の問題に關しては、ライブニッツに從つて永久眞理的なるものと事實眞理的なるものとに分つことが出来る。永久眞理的なるもの許には必然的可能對象と不可能對象とを分つことが出来、これに對する認識作用としては主として學的論理的意識が考へらるゝ故に、こは所謂認識論の問題としてのみ考へらるゝであらう。只必然的眞理も、不可能對象も、ライブニッツの單純觀念の相關に於て自らを支持する *compossible* としての個性的といふ立場より考察して、その *raison d'être* と妥當性とを確立しうべしと考へるとき、こゝにやはり個性てふ見地の許に係はる問題が生ずる。又事實眞理の領域にては、その對象として經驗的事實と歴史的實在とが考へられ、これを各々學的論理的意識と歴史的個性意識とに關係せしめて考察せなければならぬであらう。そして茲に自然科学的認識の問題と同時に精神科學的認識もしくは歴史的認識の問題が展開せられると思ふ。

私は以上ライブニッツに於ける個性の實在の問題と個性認識の問題とをすべて個性てふ概念を中心としてその意味を深化し推及することによつて彼の眞精神の少くもある程度の解明を齎らし得べしと考へる。然らば彼に於ける個性とは如何なるものとして叙せられてゐるであらうか。そは吾等がそれより汲み出しうる如



何なる意味を含んでゐたであらうか。これを叙する前に、私は尙ほ私の彼に對する理解の立場、そのものゝ省察を試みねばならぬ。このことは自ら又私が何故に、又如何様に彼の個性概念を理解し且つ重視するかをも示すであらう。

## 二、ライブニッツに對するエライシズム的理解

私は私のライブニッツに對する理解の立場の根本的特性を、あらゆる他の解釋と見解のそれより差別して、これをエライシズム的理解として特質づけたい。

ライブニッツの如き、彼自らの關心極めて廣汎にして、しかもその思想を多くの斷片的なる業績より汲みとらねばならぬとき、その體系の根本的思想なりとして把握せらるゝものゝ各種多様なることも亦止むをえない。近代に於けるライブニッツ研究に於ける尊敬すべき貢獻の數々も些細にこれを檢するときは、まことに十人十色である。しかししてこの事はライブニッツその人の思想に存する多岐不明瞭によると言ふよりも、寧ろその解明の立場に依存する。ライブニッツは自らも言へる様に、その全體系を通じて一の根幹をなす中心思想のあつたことは、尠くも彼自身しかく感じてゐたことは認めなければならぬ。しかし又、それに對する解釋に種々なる立場のそれ自身可能なることをも許さねばならぬが、その立場そのものゝ價值は寧ろ

ろライブニッツの體系の中心思想を把み、その體系の内面的 *liaison* と焦點とに一致しえ、否、彼に於て言はるべくして未だ充分なる *explimer* に達せず、只根柢に潛みたりしものをも汲み出すに如何に適はしきか否かに懸つて存する。

ゾオルフ以來ライブニッツに對する解釋の立場は固より一つではない。今これを概略に總括しても (一) 獨斷的形而上學的 (二) 數理的自然科学的 (三) 論理的認識論的 (四) 經驗的心理主義的等を擧ぐることを得るであらう。

ライブニッツ自らの意味した形而上學的もしくは先天的とは多くの場合、感性的經驗的よりもより深き基礎的考察一般であつたが故にこの意味にてはライブニッツの哲學は形而上學的哲學として特質づけらるゝであらう。しかし彼の哲學の單なる再現に止まる以上の解釋に於て、所謂形而上學的として理解せらるゝに至つたのはゾオルフ一流の單子論の物化、機械觀による偏曲したる啓蒙的知見によつてある。ゾオルフは全體として *praktische Brauchbarkeit* に多くの關心をもち乍らも、しかし根本基調に於て、分明なる認識を本質とする所謂理論的哲學に依存せしめ、すべてをこれより導かうとした。しかしてこの理論的哲學とは彼に従へば、とりも直さず形而上學であり、その主たる部分は實在に關する *Ontologie* である。ライブニッツ

に於ける個性的實在としての精神的モナドは彼に於ては極めて率直に einfache Dinge として atomi naturae として理解せられ、すべての變化は vis inertiae と vis motrix とによつて説明せられた。かくて單子は物化せられたる必然の歸結として文字通りの、他との交渉より絶縁されたるものと解せられ、判明なる悟性を超えた Zufällige として以上に、その理由の求めらるゝことなく、おのづから只偶然的なるものゝ原因をのみ求めて Verkettung der Dinge を探りゆく miraculum restitutionis となり、彼の哲學は終には奇しき啓蒙的不可知論に終らざるをえなかつた。彼は又ライブニッツに於ける精神の屬性とその哲學的方法の一部を把握して心の研究に、實驗物理學に對應する方法を應用せんとする備を作り、ヘルバルトの Hemmungssumme の心理學への先蹤をなした。<sup>註1</sup>（ヘルバルトの心理學的學風よりゾントのそれへの聯繫を吾等はこの學的傾向の上からも認識することが出来る。尙ほヘルバルトのライブニッツに對する客觀主義的理解は後に改めて考察する。）

斯様にして彼はライブニッツの精神を物化し、個性を單なる偶然化した。まして彼はライブニッツの實體概念にひそむ深き人性論的基礎の如きを汲む用意はなかつた。ゾオルフはライブニッツの哲學を解明なる叙述に於てこれを普化するに力

あつたと同時に、これに啓蒙的理解をもつて色づけ、啓蒙の時流の轉廻とともにライブニッツを忘れ去らしむるに又力があつた。ライブニッツの哲學はヴォルフに於ける如く單なる miracle に足場をもつものでないと同時に、又單に啓蒙的合理化をもつて説き盡さるべきではない。ライブニッツの哲學は啓蒙の哲學ではない。

ヴォルフ流の形而上學的理解によつてライブニッツ哲學そのものが、獨斷的なるものと見做され、これに種々なる反抗を喚び起したことは自然である。しかし、ライブニッツの哲學、そのものが、尙ほ獨斷的として特質づけらるゝ所以は何によるのであらうか。ヴォルフ的に理解せられたる形而上學が認識論的省察なきの故に獨斷的と言はるゝことは理由あることである。そして、ライブニッツにも固よりかゝる要素、もしくは表現のあつたことは事實である。しかし、ライブニッツの哲學の最も根幹たるべきものは、單なる獨斷的形而上學ではない。彼の哲學は、より多く自覺の哲學であり、決して認識論的省察を缺けるものではない。彼に於ける自覺的省察の特質をも考慮に入れて尙ほ且つ獨斷的と言ひうる點は思ふに二つある。一つは彼に於ける永久眞理の超越性の認定、二は彼が認識の問題に關して獨斷對象的なるものを定立してゐる點である。しかしてこの二點は、要するに彼にては、主觀的演繹が

尙ほ未だ充分に遂行されてゐないことを意味する。ライプニッツに於ける永久真理は言ふ迄もなく、神の思惟 *commissance* によつて存する、必然的なる真理自體、何等の矛盾なく、只自同性をのみもつ可能の微知界である。こはその可能が現實たるや否やには關せずして、自らの存立を保つ世界である。そは人の *volonté* を超越するとともに、否一般に神によつて作られたる現實的人間の意識の作用に何等本質的關係をもたぬものである。可能の世界は現實の世界よりも遙かに大である。その世界に比して人間の意識によつて考へらるゝ真理は單にその一部分に過ぎず、人の意識によつて未發見なるものと雖も、真理は真理として神の思惟に於て既に存する。換言すれば永久真理は人間的意識の作用より超越するとなされる。(Vgl. *Monad.* 2. 48, 46. *Lettre à Bernoulli. Math. Schr.* III. S. 321. *Fünftes Schreiben an Clarke. Gerh.* VII. S. 389)註

永久の必然真理の自存性をかゝる明瞭なる自覺に於て表明したる點に於てライプニッツの哲學的意味は千古に顯著である。しかし乍らその所謂神の思惟 *commissance* 又は *entendement* とは如何なるものであらうか。そは全たく人間的意識のアナロギーを秋毫も含まずして可能であり、もしくはそれと絶對の乖離に於て成立するものであらうか。眞に絶對的なる意味にての超越的なるものは、むしろ何等の意

味にても *Actus* を含まざるものでなければならぬ。永久真理はそれ自身可能と同時に實在性を含むとしても *Actualität* を含んだ *Realität* となりうるのは現實的なる個體に於てはなければならぬ。こゝにてはたとひ純粹なる無限性と永遠性とを有しえぬとしても併し作用性の眞意義は單なる可能の世界に於て求めえない。 *Actus purus* をもつ眞の實在は意識に於てその *Realität* をもつと言はねばならぬ。 (*Vgl. Monad. S. 42, 43, 44*) 他面眞理の成立を常に意識に於て考へ、認識の對象を意識一般の構成に於て認めたカントの認識論は——たとひ十全に完遂されなかつたとはいへ、その主觀演繹の方向よりいへば、これとは全たく別殊の基礎をもつて定立せらるゝライプニッツの永久眞理をもつて獨斷的となすべきであらう。そしてこれに比してはカントの所謂意識はたとひ先驗的であつても、尙ほ人間的なる意識であつて、神の超越的意識ではなかつた。しかし乍らカントの先驗意識が一面眞理成立の必然的なる論理的制約として定立され、又彼が如何に細心に人間的現實意識の作用よりその説明の根據を仰がざらんと努めたか。そはたとひ意識の領域を離れざるものにしる、單なる人間的經驗に依存せざるそれ自身に存立の基礎をもつ眞理でなければならぬことを示す。カントが主觀に於て論理的に求めて行つた *Idealität* とライ

プニッツの理性真理の個性に於ける *réalité* とは、その概念の特質上完全に相互相一致しないとしても、多分に相掩ふ領域をその内包にもつものでなければならぬ。

ライプニッツの認識論的思想が純粹なる主観演繹にあらざるが故に、獨斷的となるゝのは只に永久真理の超越性を説くが故に止まらない。『私の固有の本性の外に、私が思考せる事物の自然も亦、私が正しき方法的進歩によつて、終極に達しうべき命題を理性的且つ眞として見出す如き様式にてあることが必然である。』(Dialogus de connexione inter res et verba. *ferh.* VII. S. 190f. *Vgl. Komm. i. d. philos. Schrift v. Bucheman. B. I. S. 10f. Lettre à Fourscher. Gerh. I. 369f.*)彼は自然もしくは一般に對象の認識を單に意識の様式を以てのみその眞理性の基準とすることなく、その基準を對象自體に存する本性との契合一致に於て求めた。上掲の一文にてもさとりうる如く、彼のこの思想は單なる獨斷的ではないが、強き實在論の要素を含んでゐることは事實である。しかし、これに就ては後にも詳しく考察せんとする如く、外界對象も究極の相に於ける實在としては精神的なる主観の本性と質的に相乖離するものではない。否彼に於ては、客觀的實在も事實眞理としての實在性をもつ實體として、その自らのすべての述語的屬性を——實體の範疇として主観によつて附與規定せらるゝよりもより根

源的に——それ自らに實體的綜合をなす本性をもつてゐる。實體はすべて自らの先天綜合力を有してゐると解すべきである。たとひそれは、それに對する多様の主觀に應じて無限の變様が可能であるとはいへ、一の自體的なる本質を自らに支持してゐる。かゝる實體的綜合の力はやはり一種の精神的主觀の能力である。只これを人間の意識の一般作用に歸せしむるか、更に大いなる精神的 puissance に基づくとするかが相違するのみである。

ライブニッツの學的傾向をもつて獨斷的と見做し、これに對立するものとせらるゝカントの主觀的演繹は抑、究極にまで完遂されたであらうか。その物自體の蹟きの石は明かにその不可能を示し、これは『カントに於て根源的に豫想さるべかりしもの』理解』より出發したフイヒテによつて、より大いなる自我の作用によつて Subjekt=Objekt なる根本定立によつて打開せられざるを得なかつた。しかしてこのフイヒテに於けるカントの所謂自我よりもより深き主觀、それに於ける主客合一といふことに、吾等はライブニッツの深められたる自覺の眞相眞の一元的同一を認めないであらうか。同じくカントに於ける根源的統一を求め、思惟と實在の一致の基底の上にその哲學體系を築いたコーヘンにては、カントの主觀主義以上に多分の同一論的



客觀主義的色彩を認めうる。しかしてその根源よりの内容生産はライブニッツ的な無限小實在の連續的根本作用によつて初めて可能であつた。私はコーヘンの深邃なる哲學を、その底流に於てはカントとライブニッツの結合であると感じてゐる。要するにライブニッツの哲學はこれを單に獨斷的形而上學的として特質づけられ、考へ去られるには尙深き光を藏してゐる。

ライブニッツの哲學をもつて獨斷的形而上學的に理解することは、ひとりゾオルフのみならず、多くの哲學史に於ける再現はこの見方のもとになされてゐる。これは史的敘述として要約する上より止むをえぬことではあるが、しかし、これらの缺點の第一の因由はライブニッツの完成されたる模型を示すモナドロヂーを唯一の基準としてこれの論理的分析、平面的敘述を事とするにある。モナドロヂーはまことにライブニッツの永遠さを示すものではあるが、それに至る迄の七十年の思索の發展を通じて流るゝ具體的の眞生命と關心の全領域にまつはる多邊的聯繫とは、必ずしもこれによつてのみ汲み盡しうるものではない。ライブニッツの思想、彼の用ふる概念の眞の動機と意味を知るためには、吾等はその史的全體に互つて立體的の考察をとげねばならぬ。

ライプニッツの思想の發展を跡づけてその史的真相をさぐり、出來うる限りこゝに彼の廣汎にして多面的なる哲學の中核を擱まんとする努力は、しかし、決して稀ではない。しかしかゝる見方をとつても尙ほその解釋とその中心思想の認定とは又歸一してゐない。この種の研究に於て數學的自然科學的思想の發展に着目し、これに重點をおくものに Dillmann, Cassirer があり、論理的方面には Couturat の珍重すべき研究あり、論理的認識論的方面に鋭き知見を示すものに Russell があり、くはしき文献的研究としては J. Stein, P. Ritter を舉ぐべく、宗教的思想にも考慮を拂ふものに Schmalenbach, Görland がある。尙茲に吾等は錦田氏のライプニッツ考察を忘るゝことが出來ない。私はこの尊敬すべき文献より多くの益を享けた。註3

先づライプニッツに對する數學的自然科學的解釋に於てデイルマンの知見の特色は次の如くである。彼によれば從來の種々なるライプニッツ研究の不全は彼の全哲學の基本をなす根本思想の明瞭なる把握に失敗せる點にある。しかしてこの事はライプニッツの思想の發展に即したる史的考察に完全なる視點と努力の注がれるざるに因由し、その結果彼の哲學が先行の種々なる哲學との聯關に於てもつ特有の史的意義——しかして茲にライプニッツの固有の根本傾向を見出し得る——

―をも不明瞭のまゝに殘されてゐる。就中彼の根本的理説たるモナド説の發展的由來すら明瞭なる認識をもつて説かれてゐない。

デイルマンによれば、ライプニッツがモナド説の思想に到達したるは一つの機械論的自然觀の基本概念を縁山としてである。ライプニッツ哲學の中核と見做さるべき個人的實體の概念に彼獨殊の意味内容を見出だすに至つたのは一六八六年の Discours de Metaphysique (以下略 Discours) であつて、こゝに至る彼の論證過程は運動の相對性の考察を通してなされた。又一六八六年以降に繼續したアルノーとの往復書翰の根本の *Ideengang* は物體の本質を究明することによつて實體形相 *forme substantielle* にもられたる彼のモナド説を辯護したことに認められる。しかしこれらの思想の愈々明瞭なる表現を具へ來つた一六九四年の *De primae philosophiae emendatione et de notione substantiae* (以下略 *Emendatione*) 及び豫定調和の思想による圓熟を示した一六九五年の *Système nouveau de la nature et de la communication des substances, aussi bien que de l'union qu'il y a entre l'âme et le corps* (以下略 *Système nouv.*) にても主としてアトム論の批評によつて彼のモナド説の特質が基礎づけられてゐる。後年(一七一四)になつたモナドロデーはかゝる過程を辿つて發展した思想の抽象化であり、平面的

投影に外ならぬ。學者多くは、この既に出來上りたるモナドロデーをもつて彼の思想を理解する爲の唯一の基準とするは彼の學的特質の根本傾向の真相を把握し誤ることに導き易い。モナド説の眞性質は決して抽象的な理説ではなく、實證的な基礎の上に立つ思想である。人もしモナドの單純性、運動性といふ如きを單なる抽象的に導き出されたる概念と解するときは甚しき錯誤に陥る。モナドロデーに於てモナドといふ基礎概念より、心理的、形而上學的、神學的等の諸特質が論理的に導き出されてゐるのは、もと／＼第二次的なことで、デイルマンによれば、この間の聯關は必しも基本的必然的でないと言はなければならぬ。

デイルマンの言ふ様に、ライプニッツは全たく具體的な事實的な根據の上に *apriori* に漸々に築き上げた思想を、後年のモナドロデーにては、全たく異なる立場の上に、これを反對の方向に、即ち *apriori* に論證したものであつて、モナドロデーのみにては彼のモナド説の眞にして全たき理解を與へるに不充分なりといふ主張には私は同じうる。しかしモナドの思想が特に個性的實體の概念内容が單に自然科学的アトムの考察よりのみ導かれたといふことは充全ではないと思はれる。彼は *Discours* 及びアルノーとの論争に於けるより重要なライプニッツの思想發展もしくは着想

の動機を語る重要な表現を見失つてゐる。又デイルマンがライブニッツのモナド説の眞なる意圖は近世の機械論的説明の原理を古代哲學の實體形相に歸入せんとするにあつたとする考へにも私は同じうる。しかしモナド説の説明せんとした領域は單に機械觀的領域のみではない。ライブニッツの實體形相がモナドとしての個性的實在として理解せらるゝにはライブニッツ自身に於ても自覺もしくは歴史的個性實在の事實に基づく深き人性論的倫理的基礎が存し、その説明の意圖も人間的領域を含めた全たき宇宙に指向けられてゐた。

要するにデイルマンのライブニッツに對する發展史的考察とその着想には汲むべき多くのものがあるが、彼はライブニッツの全貌に適かなはしめんためには餘りに狭き自然科學的といふ立場よりのみこれを見んとし、この特質よりのみ彼の全哲學を特質づけ様とした。

大體に於てこれと同一の見地をもつてライブニッツを理解するものに W. Windt がある。曰く『ライブニッツの哲學はバークレーの如く心理學の上に立つにあらず、後の思辨的觀念論の如く論理的觀念體系の上に立つにあらず、又カントの如く、自然法則と道德律の爭鬭の上に基づけんとするにあらず、それは從來の觀念より甚だしく

相隔る所の科學の上に、自然科學の上に立つ。これ彼の哲學があらゆる他種の觀念論に比して優位する力を有する所以。』註<sup>4</sup>

かゝるライブニッツに對する自然科學的解釋は又容易に、彼に對する數學的理解と結合しうる。ライブニッツ研究家にして、さすが、この立場のみにライブニッツの全貌を限らんとするものはないが、しかしこの點にライブニッツ哲學の本質的なるものを認め、哲學的嚴密性の方法上の基調をこれより汲んだものが多い。ライブニッツに存する純粹數學的特質を論理的に純化して彼の *characteristica universalis & calculus ratiocinator* の思想を徹底して、これを基底として世界觀を確立することも、言ふ迄もなく可能である。ライブニッツが近世科學と哲學の嚴密性、客觀性の要求を代表し、これを基礎づけることが出來たのは、彼に於けるこの特質的なるものによつてである。この傾向が多くの哲人に受取られて效果的なる要素となつてゐることを吾等はヘルバルト、ポルツァノ、フツセアル等に見出すであらう。吾等はその學的意義を充分に承認せねばならぬ。<sup>註<sup>5</sup></sup>しかしライブニッツ的なるものゝ全たき理解としては分析的と同時に彼により根柢的なる綜合的、素數結合と同時に函數關係に認めらるゝ意味をも常に包攝して初めてライブニッツの眞生命を全たき意味にて生かし

むることをうるであらう。

吾等はかゝる傾向を又マールブルク學派に特質的なるものに於て見出す。コーヘンがライプニッツの無限小實在に於ける連続の原理に深き意味を認めてこれをもつてライプニッツの全體系を理解し、自らに執つて體系的統一の概念をその哲學の最高の原理としたこと、ナートルが論理と數理との基礎的關係を見出してその嚴密自然科學方法論の原理、基調としたこと、カッシーラーがライプニッツの Hypothesis physica nova (1671. Math. Schrift. VI. S. 68f.) を重視して幾何學と純粹運動との關係の理解がライプニッツに於て占むる意味を見出したことなど註6みなライプニッツ哲學に於ける數學的思惟の基礎的特質を把捉したものである。これはその限りに於て正しいことである。しかし、この嚴密科學的特質は方法上の問題であつて、これによつて全哲學を數學的に抽象し、もしくは數學的に狹限すべきものではないことは固よりである。私はマールブルク學派によるライプニッツの理解に深き敬意を表し、この學派によつてのみライプニッツは現代哲學に復活したと稱してよいと思ふ。しかし、この學派のライプニッツ理解に關聯してこの學派にては一般に單に科學研究上の方法的特質に限らるべきことが、稍もすれば、對象領域を理論的にのみ基準せ

しめ、もしくは對象そのものを數理化せんとする傾がある。Methodologieといふことは、方法による對象の發展的生産と、對象の嚴密性即ち對象の嚴密科學的取扱の可能を示すことであつて、固より方法を通して生産されたる内容が、方法的の制約を受けることは言ふ迄もないが、併し方法はもと、目的に従ひ、生産のアプリオリに依存し、しかしてこのアプリオリは學的領域にては只一つではありえない。この學派の本來の目的は生の全領域の嚴密なる科學的把握にあつて、こは生そのものを理論的なものに限り、もしくは生の理論化によつてそれを固定化することを意味するのではない筈である。この學派の學的傾向は對象の方法的制約を重視して、方法的對象的制約を輕視し、少くも歴史的文化的領域にては別種の生産的根源あることを強調せず、自然科學的認識に對立した別殊の方法論的省察を完全に徹底することなく、經驗的方法的制約とは直ちに數學的自然科學的に範をとることゝのみ解したるの觀がある。このことは方法といふ概念に潜む多義性にもよるのであらう。とにかくこの學派に於て稍もすれば存する方法上の論過は、歴史的文化的領域の獨自の基礎づけに不當の萎縮を來さしめたるかの嫌ひがある。しかしてこの事は又ライプニッツに對する理解にもあてはまる。



私の理解によれば、ライプニッツには素數より考へ深めた單純觀念と、史的實在より考へ深めた形而上學的個體の考とが並立し、彼の學說の二大特質をなしてゐる様である。これが又自ら彼の學的特質に於て一は數學的、分析的、悟性的、従つて又理性論的啓蒙主義となり、他は歴史的、綜合的、主意的、人性論的、目的論的となつたものである。一は彼の數學的、自然科學的業績となり、他は歴史家として、政治家として、宗教論者として表現してゐる。彼自身を各、獨立に、この二つの見地の許に研究し盡すことは固より可能であらう。又この後者の一面をのみ單に彼の人間論的側として見ることも出来るであらう。しかしこの二者は彼に於ては、決して全たき *totum discretum* を形作つてゐた筈はない。調和的なる彼に於てはこの二者は終極に根源的に調和してゐた筈である。しかしして又調和して居つたとしても、この一者の何れが優位しより根柢的であつたと理解すべきであらうか。私は後者がより根柢に潜むものであつたと思ふ。そは後に説かんとする如く、彼の思想の發展史的考察がこれを示し、又彼に於ける種々なる言表の論理的考察がこれを證する。

ライプニッツの思想を純粹に客觀主義的に理解し、嚴密に論理主義的に解釋せんとするものにラッセルがある。<sup>註3</sup> 彼によれば、ライプニッツの思想は、本質的にこれを

見れば、スピノザの哲學よりも遙かに嚴密に論理的に根本的な定義と公理より幾何學的に演繹することが出来る。しかしてかゝる基本定理として彼の重視するのは實體としての主語は、そのすべての述語を含むといふこと、理性命題は必然的分析的であり、事實に關する命題は偶然的にして綜合的であるといふことである。吾等はいく、ラッセルがライプニッツの永久真理を必然的分析的判斷として、事實真理を綜合判斷と斷ずる所にラッセルの論理的知見の鋭さを見る。そしてラッセルによれば、ライプニッツの學説が獨創的價値に富める部分は、この純粹に論理的なる考の展開にあつて、彼がこれに主觀的な要素を容るゝに従つて不純となり、不整合となる。ラッセルは又ライプニッツが自覺の事實よりして自我をもつて實體とし、しかして自我の知覺は外界の知識に從屬するとすることも、ライプニッツの根本的な思想として認め、しかしてこは、先の論理的基本命題とは完全なる統一を示しえざるものと解し、ライプニッツの本質をあくまでも論理的なる部分に措かんとするのである。この解釋はヘルバルト、ボルツァノとともに、ライプニッツの超越論主義的繼承とその方向を一つにするものである。

私はライプニッツに對するラッセルの鋭き解釋を意義あるものとするものであ

るが、しかし、それはライブニッツの全たき理解としては充全でありえないと思ふ。ライブニッツ自身に於ても客觀的超越的と主觀的作用的との兩面の對比が存することは事實であるが、しかしこは調和を拒む二元ではなく、又その調和を來さざらしめたものは、ラッセルの理解する如く、俗見に反する歸結を恐れた外的原因でもない。ライブニッツに存するとして強調せらるゝ矛盾はライブニッツにひそむ以上にラッセル自身の理解の仕方<sup>に</sup>依存してゐる。ラッセルはライブニッツに存する、しかく根本的なる自覺の事實、個性といふことに潜む實體的なる深奥な意味を餘りによき頭の働きによつて看過した。ライブニッツに於ける論理的根本命題に於ける主語と、自覺の基底に見出ださるゝ人間的實體とはラッセルの餘りに鋭き分析によつて乖離せしめられてゐる。

ラッセルと同一の傾向にあつて、而もこれと獨立に更に精細に且つ徹底的にライブニッツに對する論理的解釋を推しつめたものはクテュラーである。彼はラッセルよりもより豊富なる材料を而も、その初期のものより漸次發展的に研究し、客觀的眞理説が彼の全生涯を通じての關心を繋ぐ對象であつたと解釋する。然して彼がその著『ライブニッツの論理』<sup>註3</sup>に於て特に強調せんとする特色は、吾等の觀念はすべ

て單純觀念に分析することが出來、その複合とは *multiplication arithmétique* に類似したる齊一にして均齊なるものとする。換言すれば、『すべての眞理は分析的なり』といふ根本的知見に歸する。この見地よりしてクチュラーはラッセルの如く事實眞理に綜合的としての意味を認むることもなく、綜合判斷も究極には分析判斷に歸すべきものとするこそ、ライプニッツの眞意なりと解する。従つて事實眞理が由つて立つ理由律も永久眞理に固有なる自同律に還元すべきものと主張する。而して彼はこの論理學的特質は、ひとり論理の領域のみならず、ライプニッツの全哲學はこの論理の原理の上に立つものとなし、ライプニッツの哲學は即ち *panlogisme* なりとする。

クチュラーの銳利にして徹底的なる論理主義的理解はラッセルよりも更に *radical* であつて、ライプニッツに存する客觀論理の要素を、より純粹に闡明したと言ふべきであらう。しかしライプニッツの如き大いなる立體的存在の深き隈々はこの犀利をもつてのみ拭ひ去らるべくもない。そこには錦田氏及びカッシーラーが評せる如く、偏面的なるをまぬがれない。こゝに忽ち二つの缺陷が顯はれる。即ちクチュラーがもつてライプニッツ自身に缺けりと見做す *logique des relations* の眞本質が正しく説き得ざることになる。ライプニッツにては分析によつて單純觀念に達しう

るといふことよりも、より根柢的に單純なるものが相關に於てあるてふことが豫想されてゐる。ライブニッツの論理はむしろ相關の論理として彼の哲學は *panrelati-*  
*onisme* としてこそ、より適切に特質づけることが出来るであらう。更には又單なる分析論理のみよりは、事實眞理と個性的實體の眞性質を説くことが出来ない。理由律を同一律(ライブニッツに従へば後者は同時に矛盾律を意味す)に歸入せしむるクチュラーの考へは特質的なるものであるが、しかし私は理由律と同一律を並立する基本原理とするラッセルの考へにも(特に形而上學の問題に於て)安んずることが出来ず、只この二者を綜合したる根源律、即ち自己同一を保つものが同時に綜合的作用の理由(もしくは基礎、根源)となる如き實體綜合、先天綜合の根源性を認むることが、よりライブニッツ的なる究極であると考へる。

一面にはカント哲學の深き主觀論的認識論的立場の上から、又他面ライブニッツに存する客觀論的並に個性論的立場にも裕かなる理解をもちつゝ、ライブニッツ哲學に一貫して存する中心的なる問題を眞理の問題にありとしたのはカッシーラーである。カッシーラーの解釋はカント的主觀論的基調が強いにかゝはらず、(そして觀念論的なる點に於てラッセルの實在論的なる)と相對比してゐる)しかし論理的眞

理といふことを理解の根本核心とするが故に私はこれを論理的認識論的解釋の中に加へる。しかして從來のライブニッツに論理的理解をもつて對する人々が、ライブニッツに於ける數理、論理の基本的命題の分析的見解に主點をおいて理解せんとするに對し、彼は *liaison, relation* を重視してむしろ綜合的論理たる所にその特色を認め、しかもこれを個性、生物、歴史、宗教等の領域に轉用して理解しようとする。ライブニッツがモナドの作用として認めた *faculté perceptive, faculté appétitive* に於ける相關的統一をカントの先驗統覺の思想を準備するものとなす彼の見解や、一般にカント的認識論の色はひを深めた見方は新カント派的理解の傾きより免れえざる所であらうが、しかし彼はライブニッツの形而上學への認識論的沈潜によつて彼に根本的なる *Funktionsbegriff* を汲み出した。私はカッシーラーのライブニッツ研究を、その全領域を對象として、しかも尊敬すべき知見をもつて理解し、把握したものととして——私はその盡くに傾同するものではないが——この種の類書中、最も價值多きものとして推すにやぶさかでない。

ラッセル、クチュラー、カッシーラー等の現代のライブニッツ研究が、彼に於けるその數理及び論理の特質的なる業績の意味を強調するの餘り、彼の眞理觀はその發展

史の上より見ても、その實體觀に先立ち、獨立に考察開展せられたるものにして、兩者を分離して考察することを得とし、實體論は却つて論理を基礎としてその上に發展したものと解する事は、大體に於てその歸を一にすると思ふ。しかし私はこれに同意することが出来ない。彼の個體原理の形而上學的論考は一六六三年の處女作 *Disputatio metaphysica de principio individui* 以來一貫して存する根本基調であり、その間單純觀念の思想を産んだ素數概念より進んで函數概念を基礎とするに至り、有限因子の結合の思想が無限連續の思想に進み、その進展が一の内面的連續的發展を示すものであつて、その最後にモナド論として完結した貌を執つたのである。それは彼に一見並立して存する如く見ゆる事實眞理と永久眞理の世界を貫いて存する眞にして實なる個性實體に關しての深き自覺の深化であると言はねばならぬ。この根本特質に着眼して解釋するならば、彼に於ける論理と數理は寧ろこの個性實體論を學的なる嚴密さにて認識し表現せんための方方法的意味をもつたと言ふことが出来る。少くも私は彼の實體論を數理、論理と不可分の關係にあり、實體觀は數理と論理の基に存する問題と考へるのである。

以上の論理主義的解釋をとる人々によつて一様にライプニッツの思想の基礎的

確立を見たものと認めらるゝ Discours de métaphysique に於ても、その實體觀念は個性的實體であり、その眞理は個性の眞實性を意味した。由來單なる數理的單位、物理的因子よりは眞の個性の意味は導き難く、史的實在の眞實性は單なる論理的なる眞理の問題をもつては解き難い。ライブニッツの個性的實體の概念にはより深き自覺の基底、しかも史的實在としての個性の眞實性の自覺に基づくものが多いと思はれる。

以上の如きライブニッツに關する論理的解釋に對して心理的解釋も成立する。しかしこの意味の解釋は精密には更に經驗的心理主義的理解と、先天的自覺的理解とに分つて考へねばならぬ。批判的觀念論的省察を缺くものを獨斷的といひ、この立場による意識の理解を心理主義的となす意味にて、ライブニッツの心理主義的理解の許に吾等はヘルバルト及びヴントの理解を擧ぐべきであらう。しかしかゝることに餘り精しき考察を費やすことは吾等が當面の *Ideengang* を錯雜せしめるであらうことを憂ふるが故に、後者に關しては先きに僅かに關說せる所をもつて、その傾向を知りうべきものとし、前者に關しては次章に考察の機會あることを期して、こゝにはその攻究を略したい。只こゝには、これらと傾向を異にしつゝ、やはりこの類



項に入るべきものにして、稍注目すべき知見を示せるものとして A. Silberstein に關説したい。<sup>註7</sup> この人の解釋の特異性はライブニッツの哲學の構成の決定的特質はその實體概念に負ふものなりとし、この根柢的なる實體をもつて内面的經驗と理解せんとするにある。彼れはモナドの特質をかく解して、これより認識及び論理の妥當的要素を演繹し來らうとする。この見解に於て吾等は上述の種々なる解釋に尙未だ見出しえざりし一の新たなものに遭遇する。吾等は初めて生けるライブニッツの眞生命に打ちあたりたるかの感じがする。しかし乍らシルバースタインの研究はその史料の取扱に於ても、概念の意味規定に於ても、極めて不精密なるものが多い。彼のいふ所謂 Apriorismus とは認識の主觀よりの認識の導來を意味し、しかし、その意識といひ内面的經驗といふも、心理學的經驗的なる意味内容の多くをのみ有し、毫も學的に洗練されたるものではない。ライブニッツに存する心理學的要素、實在論的要素を、經驗的心理學的立場にて取り出したるに過ぎざる節が多い。

ライブニッツの思想の全貌を極めて穩當なる輪郭をもつて叙述し、ライブニッツに於ける自覺の特質を素直に認めるものに又 R. Latka<sup>註2</sup> がある。彼は固よりライブニッツに於て占むる數學的思惟の意味を認め乍ら、しかもそれは哲學及び神學の領域

への(これの)數學化ではなく、適用にすぎずとし、むしろ synthetic calculus に重點をおき、特にライブニッツ哲學の最も特質的なるものを自覺的なるものに認め、Will to will の要素を指摘し、とり分けライブニッツとフイヒテとの關係を重視してフイヒテはカントよりライブニッツに遡つたものと解し、このフイヒテがライブニッツに通ふ構想力の概念の意味を認めるなど、教へらるべき知見に富む。——吾等はこの一般的叙述に於てライブニッツの歪められざる全貌を見る。固より一般的叙述たるこの書より吾等はライブニッツに關する特異にして深刻なる見解と特殊なる問題の究極的闡明を期待することは出來ない。否この書の叙述は單に穩當なる包攝に優れてゐて、それは必しも明晰なる分明を伴はず、その自覺といふことの如きも明確なる概念規定を伴はざることが多い。

さるにてもジルバーシュタインやラッタの不完全不明瞭なる自覺をその代表的なるものとして擧げねばならぬ程、ライブニッツに於てかくも特質的なる自覺てふ事實を基本的なるものとしてライブニッツの解明に力むる貢獻の少きことは、私にとつては寧ろ奇異である。この方向に着目の重點を措くものとしては、西田博士の『ライブニッツの本體論的證明』等の『意識の問題』に表はれたる思想に多くの指唆

を俟つたものと考へらるゝ錦田氏の企、しかもそれは未完成に終つた文獻を見出すのみである。<sup>註</sup>私もライブニツツの見方に於て、根本に於てはこの自覺を重視する方向にあるものである。只茲に特に斷つておかねばならぬのは、私がこゝに意味せんとする自覺の事實とは、單に經驗的個人的現象として selfconsciousness をもつと言ふに止まるのでもなく、又何人の意識でもなき一般意識の反省といふことを言ふのではない。經驗的よりも先天的な、論理的よりも實體的な、人間的歴史的實在としての個性がもつ自覺の根本作用を指すのである。それは心理的自覺よりも、又カントの認識論的自覺よりも、且は又先驗的觀念論に立つフイヒテの自覺よりも差別されたる個性實在、實體論的自覺、先天綜合の作用、根源的構想の力を指すのである。

かゝる立場から私はカッシーラーがライブニツツの眞理性の基本命題の論理的性質を根本的に把持し、これを只意識、個性、歴史の領域に轉用しうることを主張するに對しては飽き足らぬものがある。私はむしろライブニツツのあらゆる眞理のよつて立つ基本命題、あらゆる叙語を含む主語としての實體といふ觀念は、むしろ自覺の事實を基礎とし、しかも史的實在としての個性の本質の内面的なる根本作用の承認にその基礎をもつと思ふ。かの根本命題の眞意味は論理もしくは數理より導か

れるのではなく、却つて論理といひ數理といふはこの根本自覺が客觀的なる嚴密性の規定を得たる一の様相に過ぎないと考へるのである。

ライプニッツにては論理と數理がその根本的法則性に於て結合してゐると同時にこの法則性は又人間の歴史的世界の法則性——個別法則性即ち個性と深き契合をもつてゐた。すべてを單純なる記號に還元しその *combinatoria* によつて説明せんとする普汎數學 *Lingua Characteristica* は論理と數理との深き契合、微積分論理 *calculus ratiocinator* に導き同時にそは最も複雑なる人間の歴史的領域に適用されてこれを象徴的に論理化して、そこに個性の法則を見、この領域をも法則的嚴密さをもつて理解し盡さんとすること、これライプニッツがまことの意圖であつた。この個體の法則性は個々に固有の事象的法則性をもつエンテレキイであつた。この仕方は歴史の理性化であるとは言ひ得ても、この意味にて啓蒙化)そは根本的に數學化でもなく、機械化でもない。事象的なるものゝ目的論的説明、目的論的なるものゝ嚴密法則性を伴つての把握であり、表現であるに外ならぬ。

私は以上ライプニッツに對する獨斷的形而上學的、數理的、自然科學的、論理的認識論的及び心理主義的解釋等について叙述し來つた。これらの各の立場によつて見

られたライブニッツはすべて異つたライブニッツである。しかししてそはその見る人々の立場そのものゝ相違に歸する。私はこれらの各がもつ存立の意味を否定しようとするのではない。何となればライブニッツの哲學の表象說そのものが然る可能を暗示するからである。實體は表象せらるゝや只無限可能の限に於てある。只吾等の求めんとする所は、しかしこの種々なる見方のうち、その相互が如何なる相関と序位を作り、その各が含む不充全は、如何なる新なるものを要求せるかを示すにある。そしてこゝから吾等は願くば異つたライブニッツから唯一のライブニッツを描いて見たい。限の中に存する本質を直観して見たい。

さて私は漸く私のライブニッツ解釋の立場について語るべき順序に達した。私は以上の如き獨斷的形而上學的、數理的、自然科學的、論理的、認識論的、もしくは心理主義的解釋に對比して私の立場をエテイシズム的理解と名づけた。それは抑、如何なる所以に於て成立し、如何なる特質をもつであらうか。(此項未完)

註1、 Vgl. Chr. Wolff: Vernünftige Gedanken von den Kräften des menschlichen Verstandes und ihrem richtigen Gebrauch in der Erkenntnis der Wahrheit. 9 Aufl. 1738.

” ; Vernünftige Gedanken von Gott, der Welt und der Seele des Menschen, auch allen Dingen überhaupt. 5 Aufl. 1732.

註2)の論文に於けるライプニッツの文献に關する引用の附頁は概ね

- C. J. Gerhardt; Die philosophische Schriften von Gottfried Wilhelm Leibniz, 7 Bde. 1875—90(略號 Gerh.)に據る。1)に含まれる部分、及びより完全と思はれる部分には
- J. E. Erdmann; G. G. Leibniti opera philosophica, quae extant latina gallica germanica omnia, 2 Bde. 1840(略號 Erd.)
- C. J. Gerhardt; Leibnizens mathematische Schriften, 7 Bde. 1849—1863(略號 Math. Schr.)
- J. Stein; Leibniz und Spinoza. Ein Beitrag zur Entwicklungsgeschichte der Leibnizischen Philosophie. Mit neunzehn Ineditis aus dem Nachlass von Leibniz. 1890.
- L. Couturat; Opusculs et fragments inédits de Leibniz. 1903.
- G. W. Leibniz sämtliche Schriften und Briefe herg. v. d. preussischen Akademie d. Wissenschaften 1—4 Bde. 1923 (著 Akademi.)
- E. Bodemann; Die Leibniz-Handschriften der Königlichen (heftlichen) Bibliothek zu Hannover. 1895 1—6(各版の異同に關するの考證に關しては、後年に成り比較的嚴密なる比較考證の細註を附する。
- H. Schmalerbach; G. W. Leibniz ausgewählte philosophische Schriften im Originaltext, 2. Bde. 1914 (略號 Schmal.)版に依據し、多くの場合斷りなくして、それに依つて譯述引用したる箇所もある。Monadologie(略 Monad.) Theodicee(略 Theodi.)の如きは語譯參照の便宜をも慮つて只S數のみを附した箇所もある。尙理解譯述にあつては
- G. W. Leibniz philosophische Werke, herausgegeben von A. Buchanan und E. Cassirer. 4 Bde. 2 Aufl. 1925(著 philos. Schrift v. Buchenan)
- G. W. Leibniz philosophische Werke, Ergänzungsband herausgegeben von Walter Schmidt-Kowarzik. 1916.
- R. Montgometry; Leibniz, Discourse on Metaphysics. Correspondence with Arnault. Monadology, second edition revised 1920. (略 Montg.)

R. Latta; Leibniz, The Monadology and other philosophical Writings. 1925. (略 Latta)

河野興一譯、ライプニッツ形而上學叙説 大正十四年

河野興一譯、ライプニッツ單子論 昭和三年

を參照して益を享けたる所が多い。

註<sup>20</sup> Ed. Dillmann; Eine neue Darstellung der Leibnizischen Monadenlehre auf Grund der Quellen. 1891. (以下引用にわたるの略號 Dillm. neue Darst.)

E. Cassirer; Leibniz? System in seinen wissenschaftlichen Grundlagen 1902(著<sup>21</sup> Cassirer, System)

E. Cassirer; Das Erkenntnisproblem in der Philosophie und Wissenschaft der neueren Zeit. Bd. II. 1922.

L. Couturat; La logique de Leibniz d'après des documents inédits 1910. (著<sup>22</sup> Couturat, Logique)

B. Russell; A Critical Exposition of the Philosophy of Leibniz. 1900.

” ; Scientific Method in Philosophy. 1914.

L. Stein; Leibniz und Spinoza. 1890.

P. Ritter; Kritischer Katalog der Leibniz Handschriften I. Heft. 1646—72. (著<sup>23</sup> Ritter, Katalog)

H. Schmalenbach; Leibniz. 1921.

A. Görland; Der Gottesbegriff bei Leibniz. Ein Vorwort zu seinem System. 1907.

錦田義富、ロッチェ妥當説の由來、大正六、七年、哲學研究

同 上、最近のライプニッツ研究に就て 大正六年、哲學研究、兩論文とも後に「實踐哲學研究」(昭和三年)に編せらる。

註<sup>24</sup> W. Wundt; Leibniz, zu seinem 200 jährigen Todestag. 1917. S. 108.

註<sup>25</sup> Vgl. z. B. Herbart; Hauptpunkte der Metaphysik. 1806—8.

” ; Allgemeine Metaphysik nebst den Anfängen d. philos. Naturlehre. 1829.

Bolzano ; Paradoxien des Ueentlichen 1851.

H. Bergmann; Das philos. Werk B. Bolzanos, nebst einem Anhange Bolzanos Beiträge zu philos. Grundlegung der Mathematik. 1909.

Husserl; Philosophie als strenge Wissenschaft. Logos. B. I. 1910.

これらに關しては後章更に觸るゝ機會がある。

註6、Cohen; Logik der reinen Erkenntnis. 2 Aufl. 1914.

Natorp; Die logische Grundlagen der exakten Wissenschaften. 2. Aufl. 1921.  
Cassirer; 上掲二著。

註7、A. Silberstein; Leibnizens Apriorismus im Verhältnis zu seiner Metaphysik. 1904.

註8、R. Latta; Leibniz, The Monadology and other philosophical Writings. 1925.

註9、この他我國に於ける注目すべき文献としては、

桑本嚴翼、ライプニッツの充足理由の原理に就て(カントと現代の哲學)大正六年

田邊 元、ライプニッツ哲學の意義、大正七年、哲學研究

等がある。錦田氏文献上掲。